

アメリカでの薬剤師への高い信頼と、  
その背景から学ぶもの

薬学部 薬学科 6年

060973417

木戸 究

私は平成 23 年 6 月 5 日～6 月 19 日の 2 週間、アメリカのアラバマ州バーミンガムにあるサンフォード大学にて行われた海外薬学臨床研修に参加した。学部 5 年次における長期実務実習で得た知識や経験を基に、アメリカと日本の医療やその中の薬剤師の役割の違いを学ぶこと。また、アメリカでは薬剤師の専門性が高く、患者や他の医療従事者からの信頼も厚いと言われているが、どのようにしてそのような地位を確立したのか、その背景を学びたいと思ったため研修への参加を希望した。参加した 6 年生 10 人は午前中に 3～4 人ずつの 3 グループに分かれて、それぞれ病院や薬局などの研修サイトを見学した。午後からは研修生全員でサンフォード大学の講義や実務実習中の薬学生によるケースプレゼンテーションに参加した。その中でも今回は、「St. Vincent' s East Family Practice」という薬局併設型のクリニックにおける、薬剤師によるワーファリン外来と「Jefferson County Department Of Health」というアラバマ州の公衆衛生局における薬剤師の活動についてそれぞれ報告する。

St. Vincent' s East Family Practice は薬局が併設されたクリニックである。そこでは糖尿病や高血圧、高脂血症などの慢性疾患の患者に対して長期的なケアを主に行う。クリニックには医師、看護師、ソーシャルワーカーなどの医療スタッフと共にサンフォード大学のファカルティを含めた薬剤師 2 名と、実習中の薬学生 2 名が在籍している。クリニックには薬剤師専門外来としてワーファリン外来が併設されているのが特徴で、そこではワーファリンを服用している患者に対して個々に面談を行う。ワーファリンは出血などの副作用や、他の薬・食品との相互作用が多いため服薬の際に問題になることが多い。また、薬が適切にコントロールされているかを確認するために INR 値などの血液凝固能を確かめながら投与量を調節する必要がある。よって薬の専門家としてファーマシューティカルケアに深く関わることのできる領域であり、アメリカの薬剤師は治療において他の医療従事者や患者から高い信頼を得ている。ワーファリン外来では、薬学生も患者のケアに関わっている。服薬コンプライアンスや副作用発現の有無などを確認した後、採血を行い、INR 値の結果に応じて今後の投与量や治療方針の決定を行う。これに対しファカルティは補足的な説明や治療方針決定の補助を行う。薬剤師や薬学生は、文献やガイドライン等を参考にしながらエビデンスに基づく医療を実践し、高いコミュニケーション能力を通して患者個々に合わせた治療方針を提案している。患者や他の医療従事者は常にベストなアウトカムを導き出す薬剤師のパフォーマンスに満足している様子で、薬剤師が今の地位や信頼を確立している理由もはっきりと見て取ることができた。日本でも薬学教育が 6 年制に移行し、臨床のスペシャリストとしての今後の薬剤師の活躍が社会から注目されているが、深く薬物治療に関わり、最善のファーマシューティカルケアを実践していくためには、私たちも

自ら問題点を発見し、解決していくノウハウを学生のうちから意識してさらに蓄積させる必要があると感じた。

次に、Jefferson County Department Of Healthについて報告する。

Jefferson County Department Of Healthは感染症や自然災害、バイオテロやその他の人災など、人々の健康に影響する緊急事態の際に迅速に対応するための組織で、医師や看護師や薬剤師をはじめとするスタッフ約500名が働いている。主な活動内容としては、緊急時の対応策の考案、状況把握、救急キット・飲食物・医薬品の確保と供給、速やかな情報提供、災害時簡易医療施設：POD (Point of Dispensing) の設置など多岐にわたる。この中でも特に興味深かったのはPODでの薬剤師の役割である。PODは災害時に体育館や広いホールに設置され、カウンセリングやスクリーニングを通して市民の健康状態をチェックする。必要に応じて薬が処方されたり、ワクチン接種が行われる。PODにおける薬剤師の役割には治療の必要性や優先順位などを判断するトリアージや、必要な患者に対する薬の処方やワクチン接種などがある。この際、薬だけでなく病態や免疫など幅広い医学的知識や判断力が必要となるので、とても責任がある役割だと感じた。また、事態が落ち着いた後も患者や市民の精神面を支えたりして、医療人として広く社会に貢献しているということがわかった。

緊急事態の場合はマニュアル通りにならないことが多く、思考が停止してしまう場合もあるかもしれない。しかしながら、日本では東日本大震災の影響で困難な状況下においても、薬剤師が被災地の健康面、精神面、衛生面で多大な貢献を果たしている。これは日頃から立てている対策やシミュレーションの成果だと思えるが、それだけでは今回のような活躍はできないと感じた。St. Vincent's East Family Practiceでの経験で感じたことと同様に、普段から常になぜだろうという視点を持つこと、つまり問題点を見つけ、それを解決できる手立てを構築しようとすることを心掛けていれば、緊急の場合でも思考停止にならず、最善の対応方法を迅速かつ的確に判断できるのではないかと感じた。日本では、緊急時における薬剤師の職能の及ぶ範囲はアメリカと比べるとまだ限られているが、行動や結果で薬剤師の必要性を社会に示し、認めさせる努力を引き続き続けていかななくてはならないと強く思う。